

アウグスティヌスの『告白』11巻における時間探究

寺 本 稔

0 照 準

『告白』11巻17節において、アウグスティヌスは「時間とは何か (quid est enim tempus?)」と尋ねて時間にかかわる探究を始めている。従来、この問いのかたちから、アウグスティヌスによって時間の定義がなされているかどうかが問われてきた。

アウグスティヌスは、時間測定の文脈で、測定対象となる運動とその運動の時間を測る時間との区別から、アリストテレスやストア派とは異なり時間が運動、もしくは運動に属する何かであるといった定義や理説を採らず、未来・現在・過去を、三つの「魂 (anima)」の働きとして転化させていくことを契機に、時の間を追求している。この点において『告白』11巻は、彼の他の著作、箇所に類をみないものとなっている。確かに、『告白』の時間探究において見られる見解や論点は、他の著作に類似の表現で見出されることもまた事実である。しかし、たとえば、真理たる知恵と不死なる生という善を率直に神と魂にそのものとして求め、かつ直截的に述べている『ソリロクィア』を始めとする『告白』以前の著作群に属する、ローマで執筆された『音楽について』や『魂の不死について』に見られる弁証方式において言及されるものとは異なり、『告白』においては、慣習的な時間に纏わる言語使用の検討から始まり、そこから照らし出され、見出される時間に関わる ('distentio animi' を始めとする) 洞察が時間探究の過程、問い尋ねる過程を抜きにして述べられてはいない。

実際、問いのかたちはその探究の性質に深く関わるがゆえに、単に問いの形式の分類といった方法論上のことがらに収まらず、探究の性質を明るみに出す諸家の解釈もこの問いのかたちの把握如何で左右されるものと考えられる。そこから、本稿の課題もこの問いの意味を明らかにすることに存する。この課題に対して、アウグスティヌスによって、時間そのものの本質的な定義がなされているのではなく、むしろ、時間を測るという営みの吟味を通じ、事例から得られた洞察を拡張することにより時間の

特徴付けがなされているとの解釈を、その内実とともに提示したい。

以上の解釈をなすにあたり、まずもって踏まえておきたい解釈上の力点を挙げておく。それは、『告白』当該巻17節冒頭からも明らかなように、時間は永遠と等しくないと限定がここでの時間探究の動機となっていることである¹⁾。この点が踏まえらるることにより、アウグスティヌスが時間探究の途上で躓く時間に纏わるアポリアの背後に永遠の「現在」をめぐる想定があることも了解されうるものと思われる。

本論では、当初の問いが問い直されることで展開する探究の過程に着目しつつ、『告白』11巻17節以降でのアウグスティヌスの議論を詳しく辿り、ついで、時間探究の意義を時間と永遠の対比の文脈から考察し、彼の時間の特徴付けとその内実を述べることにする。

1 アウグスティヌスにおける時間探究の筋道：「現在」の問題

1-1 習いの時間：過去・現在・未来

アウグスティヌスは、『告白』11巻17節以降、先ずもって時間を過去・現在・未来の三つの部分からなるものとして探究を進めている。しかし、過去・現在・未来が出来事存在を条件にして述べられる場合、それらの出来事そのものの存在について、それぞれ否定的な診断が下され²⁾、その上で、例えば通常使用される「過去十日間」、「以後十日間」などといった（時間）表現が検討される点は注意されるべきである。というのも、後者の検討においては、明らかに時間の長短といった「間」が問題となっておりアウグスティヌスが、時間の長さや短さを語る時間測定の議論への布石としているからである。この点を踏まえた上で、アウグスティヌスの時間測定の議論を見てみよう。

- 1) 過去や未来について「長い時間」、「短い時間」と通常述べられているが、どうして、今は存在しない過去や未来といった時について「長い」、「短い」などと述べることができるのかと問われる（*Confess.* 11. 15. 18）。
- 2) 「現在の時間が長くありうるのかどうか」（*Confess.* 11. 15. 19）が、1)の考察から、さらに問われる。
- 3) 時間を感じし測るとき、「過ぎ去る時間」を測っている（*Confess.* 11. 16. 21）。
- 4) 過去・現在・未来というべきではなく、「過ぎ去ったことがらの現前・現在ある

ことがらの現前・来るべきことがらの現前」(Confess. 11. 20. 26) というべきである。

2) の問いは、1) の考察から導き出されるのだが、このとき、アウグスティヌスのある想定が浮き彫りになっている。アウグスティヌスは、1) の検討において「長くありえたものは、現在であったとき、存在していた」ことを理由に、「過去の時は長くありえなかった」としている。同様に未来の時も未だないのであるから、長くはありえない。ここから、時間の存在基準に「現在」が考えられており、この基準の想定のもとに議論がなされていることがわかる。だが、問題は同じこの存在の基準である「現在」からアウグスティヌスの時間をめぐる議論にアポリアが出来ることである。

1-2 「現在」の縮減と瞬間

2) の問いに対してアウグスティヌスは、通常、「あいまいな」仕方で述べられている「現在」と呼ばれうる時を例示しつつ、その「現在」を縮減している。「現在」の縮減の議論の目的は、「現在」が時の「間」という意味で「長い」と呼ばれるという仮説を立て、それが妥当かどうかを具体的に検討することである。この仮説を検討するため、「(今世紀) 百年」, 「年」, 「月」, 「日」, 「一時間 (hora)」の五つの事例が検討されるが、どの事例における現在の間も「さらに」部分的なもの (particula) によって過ぎ去るので、全体としての「現在」がそれらの事例からは見出されない。実際、当の百年の間にある、往く (agitur) どの一年も「現在」に数え入れられるが、百年は往く現今の一年以外は過去もしくは未来もしくは両者に分割される。従って、その百年は「現在」ではありえない。だが、百年のうち過ぎ往く一年は「現在」であるということが残っており、今度は、過ぎ往く (qui agitur) 一年が事例として、これが「現在」かどうかといったかたちで仮説の検討が繰り返される。結局は一時間そのものもさらに短い逃がれる「部分」によって往く、と指摘されるに到る。

以上から、アウグスティヌスは、「現在」と呼ばれるものは、「どれほど小さなものであれ、いかなる短い時間部分にも分割されえないもの」であり、「現在はいかなる間も持たない」(praesens nullum habet spatium) と帰結する。

「現在」に関するアウグスティヌスのそもそもの想定は、時間に「間」があるとす

れば、それは「現在」の時が「間」の「存在する」時だということであった。しかし同時に、「現在」は未来や過去と区別される時であるとすれば、その想定からして、「現在」は「間」として長さを持つがゆえに、過去あるいは未来、もしくはその両者に分割されるのであり、「現在」と呼ばれる身分を持たないことになるであろう。しかし、通常（ここでも例にもれず）、「間」の長さあるいは短さについて語られているのであるから、この帰結は、時間の「長さ」を語っているにも関わらず、長いと呼ばれうる時が存在しないということを導いてしまう。アウグスティヌスはここでアポリアに陥るのである³⁾。

このアポリアがいかにして乗り越えられるのかを見る前に、このアポリアに到る途上で観察できたことを述べておきたい。まず、先述の「現在」の探究にあつては、いわば純粋な現在という「間」を確保しようとするのが、かえって「過ぎ行く」という時間の特徴を示す結果になっている。それゆえ、この局面では、当初の仮説の検討から得られた洞察において、一定の特定される「瞬間」が時間の最小（極小）部分として析出されているわけではない。つまり、時間の最小構成要素として「瞬間」が同定されているとは直ちに述べることはできない。「瞬間」として「現在」を定める特別の目的がここにあるわけではないからこそ、「現在」が謎として躰きの石になるのである。

ここまでの探究段階において、未来・現在・過去といった時間の慣習的表現を厳密に述べ直すことが目的となっていることは、アウグスティヌス自身によって明示されている。上で見られたように、「現在はいかなる間も持たない」ことは「全体が現在でないならばそれは『現在』ではない」という規定に応えるために提出された理論的な要請である。検討の結果、当初の仮説は応じることができなかったということになるが、この帰結は、存在からすると依存されるべき「現在」という時が「間」からすれば無であるということ物語っているように思われる。そうであれば、「現在」そのものは「間」のある時ではないということになる。

1-3 過ぎ去る時と時間測定

『告白』において著者自身によって実践されているように、過去や未来についても語っているのであるから、語られる以上、過去や未来も何らかの仕方であるのではないかと推察される。ここで、現在の存在論的な優位性とも呼ぶべき想定がまた働き

アウグスティヌスは、「(過去や未来が) どこに存在しようと、存在するものは何であれ、現在のものでなければ存在しない」と述べ、上で、それ自体としては存在しないとされた過去の出来事や未来の出来事が、語りや時間測定の営みという脈絡で存在すること、すなわち、それらが例えば証言やしるしを通じて間接的にであれ現前しているものであると説明している。ここから、4) が案出されていると思われる。過去・現在・未来のそれぞれが、厳密には (proprie), 「記憶」(memoria), 「直視」(contuitus; attentio), 「予測」(expectatio) の三つの精神活動により識別される意味で存在するといわれうるものであり、従って、一端は上で否定された三つの時間部分の存在もこの意味で手許に見出される。

記述の順序は前後したが、3) は、上で述べられたアポリアの打開案として述べられている。この見解は、2) の縮減の議論において、「現在」と呼ばれる時については厳密ではない (non proprie) として反故にされた、「過ぎ行く」(agitur) という事態への着目から出来している。

3) の見解の優れた点は「過ぎ去る時」そのもの(いわば「絶え間なく流れる時」といった見解に留まらず、時間を感じ測定する営みの役割を述べている点にある。感知し測定するという営みの分節化とともに「過ぎ去る時」の分節化もなされるからである。実際、アウグスティヌスは、当初、'quid est tempus?' と尋ねて取りかかった探究を繰り返し問い直すことで進めている。このとき、同じ問いが字句通りに反復されるのではなく、問い自体も再び定式化し直されている。

上で述べられた「過ぎ去る時」が単に過ぎ去るのであれば、その結果は過去しか残らないのであるから、「過ぎ去る時は、どこから (unde), どこを通じて (qua), どこに (quo) 過ぎ去るのか」が問われ、「予測から (ex), 直視を通じて (per), 記憶へと (in)」(11. 21. 27) 過ぎ去ると応えられるのである。21節において、現在・過去・未来の三つの時間表現がそれぞれ「魂」の働きによって述べ直されるとき一つの議論上の契機をなしていたわけであるが、今度は「過ぎ去る時」が「魂」の働きから述べ直されようとしており、ここに第2の契機が見て取られる。

1-4 「運動」と「時間」の区別：時間の定義はなされたか

これまで、1) から4) の探究段階に従い、問いの連続性と契機という観点から時間測定の議論を見てきた。前節末尾の指摘に従うとしても、「過ぎ去る時」そのもの

が三つの現前によって述べ直されたに過ぎず、終始尋ねられてきた事実上測られ、長さや比較が述べられもする時の間 (spatia temporis) はなおも明らかではない。本節ではこの点がいかに探究され、そこから見出されたものが何かを見ておく。

時間の力 (vis) と性行 (natura) を見極めようとするアウグスティヌスの探究の指針から、天体をはじめとする物体の運動そのものが時間であるといった伝統的な説が斥けられている。あるものが運動することとそれを測る時間は異なるからである。事実上、確かに周期的な運動は単位時間 (mora) として使用されるが、その単位はそもそも運動という出来事ではないかと遡及されうる。さらに重要な指摘は「時間において (in tempore)」物体が「運動する」ことを測るのであり、ある場所や位置においてではないという点である。

以上を背景に、時間が運動と区別されるある種の「拡散 (distentio)」(11. 23. 30) だと述べられるとき、ある出来事が、なされ (gesta), 終えられた (finita) ということから、尺度が不定ではあるが始終のある時間の経過 (interualla) が指摘されている。また詩句朗唱の例で示されるように、句・脚・音節といった詩歌の構成単位は詩歌も含め、場所の間 (loca) を測る場合とは異なり、延ばされたり切り詰められて唱われることで時間において一定であるとは限らない。この指摘の直後、時間が何らかの「拡散 (distentio)」(11. 26. 33) だと述べられるのは確固とした「一定の時間の尺度 (物差し)」がないからである。いずれの例でも、「拡散」は時間が何らかの一定の尺度であることに対する否定を示唆して述べられている。

従来、'distentio animi' は、アウグスティヌスの時間の定義と解されてきた。その理由は33節の「時間が何らかの拡散 (distentio) であり、精神の拡散でないとするば訝しいことだ」という文言に基づく。さらに、時の間について時間を感じし、測っていることとして、(予測から) 直視を通じて記憶に留まる「印象 (affectio)」を測っているとあり、過ぎ去る時の把握が繰り返し述べられてきた三つの精神の働きによりなされている、ということになりそうではある。だが、こうした文言は前節の「時間が何かを知らないのに、時の[間]をいかにして知っているのか」という問いに答えているのであろうか。当の問いそのものを見てみるならば、明らかに「時の間をいかにして知っているのか」という問いに絞り込まれたうえで、「印象」を精神の「拡散」に基づいて測っているということになるのであり、これは時間を感じし測定しているということを明確にしているとはいえても、「時間とは何か」を説明している

は言い難い。従って、‘quid est tempus?’という問いが、時間そのものの定義を与える問いであるとすれば、アウグスティヌスはここで時間の定義を行っているのではないといえる。これに代わる代案に関しては、先に検討しておきたいことがらがあるので、後に戻って述べることにしたい。

1-5 アポリアの解消と代償：二つの検討事項の提起

以上で見られたとおり、アウグスティヌスの時間測定議論において時間と運動の区別をなすことが、文字通りの空間とは別に、時の間の生成への考察に大きく貢献していることが示された。そのとき、‘praesens’が、ある出来事の存在の基準となる意味での「現在」から、生じ、過ぎ、消え去ったその出来事に基づく「印象」の「現前」という意味へと転化されつつ考察されたことが重要な契機であったといえるであろう。

だが、運動と時間が無関係であるとは述べられていない点は留意されるべきである。時間の長さを記憶における「印象」について測ると述べられるとき、何かに対して引き起こされるものが「印象」である限り、かつあるものの運動や変化が痕跡として残される以上、これらは無縁のものとして切り捨てられてはいない。無かったものが生じることで運動がはじまり運動が終わることで始まるということが時間測定の活動には終始つきまとうのではなからうか。この点はやはり運動に戻って考えられるべき問いである。これが、検討されるべき第一点である。

また、3)の見解が検討されるにあたり、それまで存在基準として述べられてきた「現在」への言及が少なくなるのはなぜであろうか。確かに、「現在」の時そのものは「間」を欠くが、現在にありながら「直視」し続けることに依って記憶に残る、ある対象の「印象」（この「間」を測ることができる）が生じるという点（11. 28. 37）では「現在」も要としての地位を失ってはいない。「存在するであろうものごと」が「存在していたものごと」になるのも、目下現前しているものを認識しているという意味での「現在」における「直視」の働き（praesens intentio）を通じてこそ成立するからである。幅のある現在と通常述べたくなるのも「直視」を通じて未来や過去と絡み合っていることに因る。精神の働きである「直視」という実質を抜きに「現在」と述べることに意義がなくなるのは時間測定という活動から時間を述べる上では然るべき道行きであったといえるであろう。

とはいえ、2)においてアポリアが生じる要因となった「現在」に関わる想定が「直視」の働きにも妥当するならば、いかなる意味で「全体」として「直視」は現在といえるのであろうか。2)におけるアポリアが乗り越えられたのであれば、ここで何かしらの仕方で当の想定に妥当するか、そもそも想定が誤っていたかが明確にされてもよい。これが検討されるべき第二の点である。

次章では、以上二点の検討事項、時間と運動、時間と現在という二つの対の背後にある想定を、すなわち、以上で述べられた時間に纏わる議論が何に負っているのかを見定めるべく、検討を進めることにしたい。

2 アウグスティヌスにおける時間論の後景

2-1 変化と継起における「現在」の意義

ここで詳述することはできないが、後の『神の国』といった著作においては、時間が被造物の運動のもたらす変化なしにはないと明言されている⁴⁾。事実、『告白』においても、時間の成立が運動及びその類縁の概念に負っている点が述べられている。この点について、全てを挙げることはできないが、『告白』11巻における他の関連箇所には次の表現が見出される。以下、時間と運動及び変化、そしてそれらに類縁する概念に関わる例を挙げる。

- 〈1〉「瞬間瞬間があなたの合図に基づいて飛び移っていく⁵⁾」
- 〈2〉「過ぎ去ったものはすべて来るべきものによって追い払われ、来るべきものはすべて過ぎ去ったものに引き続いて生じる⁶⁾」
- 〈3〉「諸音節が鳴り響いて、第一音節の後に第二音節が、第二音節の後に第三音節がそのとき順々に過ぎ、結局残りのものの後に最後の音節がきて、最後の音節の後は静寂が過ぎた⁷⁾」
- 〈4〉「何であれ、あったものがなくなり、なかったものがあるようになる限りで生成消滅する⁸⁾」

ここで見ておきたい点は、〈1〉から〈4〉において運動や変化、推移が述べられる際には、過去、現在、未来といった時間部分が表に出てこないということである。これは、たまたまそうであるというわけではなく、先取りして言ってしまうと変化や

推移といったことがらにあっては、現在が隠されているという仕組みがそもそもあることによってなのだと指摘できるであろう。過去、現在、未来が「慣習 (con-suetudo)」として言語に流通しているものであり、アウグスティヌスがこれら三時制によって分節化される時間部分それぞれについて存在論的な要請を述べていたことからすると、とりわけ〈2〉の表現に着目することは自然な道行きである。なぜなら、〈2〉においては「praeteritum」や「futurum」と書き付けられており、時制の名か出来事を示すものかは曖昧であるが、その要請から後者と解釈すると、明らかに現在にあたるものが欠けているからである。

〈2〉の章句直後の箇所で「あらゆる過ぎ去ったものごととあらゆる来るべきものごとは、常に現在であるものから創造され流れ出す⁹⁾」と述べられていることは注目に値する。〈3〉が順序があるものの順序に従った進展を述べていることから、これを踏まえて、〈2〉を見てみると、常に現在で在るものに支えられている過ぎ去るという事態もしくは継起が述べられているように思われる。〈1〉では、単に、時が刹那的に過ぎ去るということではなく、いかにささやかな局面にあっても過ぎ去るという事態が神の合図に基づくことだと述べられている。このことを〈2〉から今しがた引き出された解釈と合わせてみるならば、過去や未来の出来事の成立と時間的な継起が同根であり、それゆえにその都度の現在にあたる継起がこれを表現しているといえるであろう。

ただし、〈4〉が変化、生成消滅を述べているとすると、〈1〉から〈3〉でみられる継起や推移とは異なり、存在もしくは状態に重点があるように思われる。そのとき、順序や上で指摘された継起と〈4〉で述べられる変化という事態は区別することができる。この区別の意義は、一方で順序や継起、過ぎ去るという事態は時間的なあり方であるということをも補足するもしくは特徴的に示すということであり、順序的にかつ継起的に過ぎ去るあり方は過ぎ去ったものがそのまま存在し続けるというあり方ではないという点を変化は支持するのである。これに対して、上で詳しく見られたように「直視」に応じて「記憶」に残される「印象」が留まることは、当の「痕跡」を残すことがらに過ぎ去らなければならないという条件はあるが、過ぎ去ったものが留まることを許したはずである。だが、あらゆる過ぎ去ったことやあらゆる来るべきことが依拠する「常に現在である」ものは、前章で述べられた「現在」にはあてはまらない。というのも、「仮に、ある現在が常に (sempiternum) 現在であって過去へと移行しな

かったとすると、もはや、その現在は時ではなく永遠となったはずである」(Confess. 11. 14. 17) からである。

1 で見られた、過ぎ去ったものごとや来るべきものごとの存在基準であった現在も、現在の縮減の事例の検討から明らかにされたように、いかなる間も持たず過ぎ去るものであった。従って、時間があるということは過ぎ去ることであるという特徴付けは既になされており、それは、永遠と時間の対比上で（とはいえ永遠でないという否定的な限定だけでなく）なされていたといえるであろう。それでは、現在の縮減の事例を検討する際にアポリアに陥る契機ともなった、現在が全体で「現在」であるという想定はいかなる現在の時にもあてはまらないとしても「直視」という働きには相応しいのであろうか。以下ではこの点を検討する。

2-2 活動の遂行と全体

1 の「現在」の縮減の事例に対照的な事例が 37 節において述べられる歌唱の事例であり、先述の記憶・直視・予測の精神の働きの関係を示したことがらが拡張されている。熟知した「歌」に関し、歌い始める前は、歌「全体」に予測が向けられており、歌い始めてから行為中では、精神活動の生が、記憶と予測へと拡散される (distenditur)。また直視は現在に臨んでおり、これを通じて唱おうとする「部分」(未来) が唱った「部分」(過去) となり、予測は短くされ、記憶は長くなる。結局、予測の「すべて」が消尽され、記憶へと「すべて」移る。以上のことは当の歌の「部分」においても当てはまり、その歌を小「部分」として含む、さらに長い活動(行為)においても当てはまり、人間の活動(行為)を「部分」として含む人間の「全」生涯においても当てはまる。さらに、人間達の「すべての」生涯を「そのうちに」含む人の子らの「全」世代においても当てはまる、とされる¹⁰⁾。

「現在」の縮減が示された事例において鍵になっていたのは、ある時が現在であるのはその「全体」が現在である場合に限るといった想定であった。従って、「全体」とされる時がある部分に分割されるのであれば、その時は「現在」ではないとされたはずである。一方、ここで示される「活動 (actiones)」の事例では、「全体」が「部分」に分割される過程そのものが拡張され適用されている。このような違いは、表面上の違いに留まらずアウグスティヌスの考えに基づく由あるものと思われる。まず、ここで採り上げている事例においては、先述された「現在」を巡るアポリアは喚起さ

れない。その理由は、為していることに現在臨んでいる「直視」の働きがあるからである。そして、以上のような活動は運動とは区別されていることも注意されるべきである。この点は、アウグスティヌスにみられる記憶の働きの重視を述べているように見える¹¹⁾。というのも、熟知している歌が例示されており、これが予測の対象であれば、記憶されているから予測する、ということになるからである。活動は少なくとも以上の点で運動や変化と異なるのである。

実際、目下検討している「全体」と「部分」を巡る二つの事例そのものがこれを語る。「現在」を巡るアポリアに陥った議論においては、事例を通じて「現在」と呼ばれるに値する「間」が求められていた。一方、「活動 (actiones)」の事例を通じて展開されているのは、過去のものへと移りゆく「間」を有する「活動 (actiones)」が述べられており「間」の成立が前提されている。前者においては、「全体」で「現在」となるものの否定の結果、時間のいかなる部分も過ぎ去るという特徴を述べるものであり、後者においてはある活動的な生の先取的な「全体」の脈絡でこれら「全体」の部分的な実現と遂行とが相即であることが示されているのである。

この時間的な「隔たり」は「直視」による知のあり方にも当てはまる。というのも、特定の「現在」に身がおかれることによって、これまでという意味での「過去」とこれからという意味での「未来」も発生するからである。そこからいって、たとえ時間的な事柄を全て知るとしても、そのさい特定の時間的な「現在」において知るのであるから、「直視」も、時間的な事柄の「全て」が対象になる場合であれ、時間的な特徴をなおも有するのである¹²⁾。

2-3 時間的なものたちの全体と部分

11巻の時間探究がなされる箇所であって、後半、自らの「魂」に呼びかけることで議論が進むが、4巻においても自らの「魂 (anima)」を鼓舞する場面が15節以降長く続いており「魂」の定位がどこになされていたか(なされるべきであったか)が述べられている。ここで見ておきたい点は、「全体と部分」のあり方と肉の感覚の関わりである。

「おまえ [魂] が肉を通じて感覚するものは何であれ、部分において存在し、これらの部分はその部分である当の全体をおまえは知らないのに、それらの部分が

おまえを喜ばせている。だが、仮に全体を把握するだけに足る力をおまえの肉の感覚が有していたとして、おまえがその全体の部分において、おまえの罰として正当な分を受け取っていなかったとすれば、現在において存在するものは何であれ過ぎ去ってもらおうよう望んで、むしろ、全体がおまえに喜ばしいものとなったであろう。……¹³⁾」

引用された箇所から、「魂 (anima)」の働きの一つである感覚は、「部分」をひたすら享受することを「正当な分 (iustus modus)」とするものであると、アウグスティヌスによって考えられていることが分かる。無論、時間を感じ測定すると述べられる場合に、アウグスティヌスが感知にどれほどの分を与えていたかは明確ではないが、少なくとも「部分」を享受する働きを含めているもしくは踏まえているとはいえるであろう。また、『告白』において重要なモチーフのひとつになっている、彼が自他ともに迫る「何を喜ぶのか」という主題をめぐる、ここで詳しく考察することはできないが、「部分」よりも「全体」の方が「より喜ばしい」と述べられていることは留意されてもよい。

先述の11巻の議論においては、「より喜ばしい」といった価値判断を理由に「現在」が「全体」であるべきだとは少なくとも明示的には述べられていなかった。逆にこのことが11巻において時間が倫理的な相においてのみ述べられていないという見解を支持するものと思われる。つまり、「全体」と「部分」に関わる価値判断（順序ではなく価値の序列関係）が時間について述べられる場合、それは自明ではないということである。従って1の現在の縮減の議論で見られた、「現在」という時が「全体」であるように求められること自体は、時間探求の当該局面においてこそ出来る理由を持っていたのである。

3 時間的な現在と留まる永遠の現在（結）

慣習 (consuetudo) から時の間の魂における創案 (inventio) という過程を経た、アウグスティヌスの時間探究の成果とは何であろうか。それは、'anima' の時間的なものへの関わりが露呈することである。この点は、上で見られたように『告白』4巻15節から同17節において全体と部分を巡り展開された魂の「留まらないものたち」への定位と肉の感覚の「分」に纏わる説話とも重なるが、11巻では二つの事例それぞ

れから明らかになる「現在」の意味に現れていた。上で見られたようにそれぞれ、不可分な全体という意味での現在と継起的に成立してまとまりをなすという意味での現在である。これを踏まえて議論を振り返り、考察を加えてみたい。

時制批判に切り離せない仕方に関わっていたのが、日常的に語られる「時間の長さ、短さ」であった。アウグスティヌスが躓いた「現在」を巡るアポリアは精神の諸々の働き相互の結びつきにより解明されたが同時に錯雑なる「魂」の慣習も露呈したといえる。探求の過程で、それぞれのアポリアが時間の特徴を浮き彫りにするという点で否定的なものに留まらないことは、上で見られたとおりである。アウグスティヌスの『告白』11巻の時間探究が示す成果はこのアポリアという梃子による時間の特徴付けという側面をもつのである。従って、本当は存在しないものが単に「ある」と主張されているのでも、魂という実体に時間性といった属性が帰されたわけでもない。むしろ、このことが明らかにするのは、「現在」において時間的なあり方をするものたちを捉える魂自身の有様である。

以上のように解することができるならば、上で述べたように継起や順序といった時間的なことがらには、「常に現在であるもの」によって支えられている以上、それを実現する契機になっているのであったのだから、「現在」の状態、あり方に依存するのである。これを裏側からみるならば、アウグスティヌスが陥った当初の「現在」に関わるアポリアは「常にある現在」をある時間的な「現在」に定位することに似ているのかもしれない。

1-2において、「全体」で「現在」であるべきとの想定から述べられた「現在」は、いかなる部分にも分割されない領域であるといえるならば、継起的な観点からすると継起する前後（先後）の間なき間である。ある有りようと、別の有りよとの狭間である。狭間に留まることは変化を留めることに等しい。すると、過ぎ去るが変化しないということが「肉の眼」の弱さ（認識）に負うことであるとすれば、変化するものは過ぎ去りうるし、過ぎ去るものも変化しうると少なくともいえる（「目で見ただけしか信じない」観点からして、「しうる」と述べている）。従って、「現在」は、過ぎ去ったものにも、来るべきものにもいずれにも属さない、つまり、過ぎ去らない（方向はどうあれ移行しない）間にあるということになる。このような場合に、時間を測ることができないということが問題になる（拘ることになる）のは「魂」も「被造物」であり時間的なあり方を蒙るからである。

ここから、上で指摘されたように、「時間はいわば精神の拡散である」とは、時間を測っているという「活動」に即して述べられたものであり、時間そのものを定義するといった目的から述べられてはいないといえる。‘distentio’が時間は天体の運動であるという説に対する反例と詩の構成単位といった長短の包含関係を持つ尺度を、唱うということで当の尺度間の関係を不定にする例からそれぞれ提示されたことは踏まえらるべき点である。‘distentio’が留まることを絆す、ある場を占めて事に従うところを留めずにまばらにする、時間の力や性行の謂いであれば、「過ぎ去る」(agitur)という特徴に結びつくと考えることはそれほど不自然ではない。そして、他面、アウグスティヌスのアポリアの解決もここにある。それは、過ぎ去るあり方をするものが、過ぎ去るものと解るとき、それは解消されるということであり、この含意は、留まる間もなく純粹に過ぎ去るのでもなければ、特定の「現在」に状態として留まり続けるのでもない狭間に「魂」があるということである。

〈使用されたテキスト〉

- Augustinus, *Confessiones* (Skutella 版).

Les Confessions, introduction et notes par A. Solignac, traduction de E. Tréhorel et G. Bouissou, 2^e édition, Institut d'études augustiniennes, œuvres de Saint Augustin 14, 1996, et œuvres de Saint Augustin 13, 1998.

注

- 1) *Confess.* 11. 14. 17, 'Nullo ergo tempore non feceras aliquid, quia ipsum tempus tu feceras. et nulla tempora tibi coaeterna sunt, quia tu permanes; at illa permanent, non essent tempora.'
- 2) *ibid.*, 'si nihil praeteriret, non esset praeteritum tempus, et si nihil adueniret, non esset futurum tempus et si nihil esset, non esset praesens tempus.'
- 3) P. Ricœur, *Temps et récit*, tome 1, Seuil, Paris, 1983, p. 20. リクールは、アウグスティヌスのそれぞれのアポリアがまた新たな困難を出来させるスタイルに着目し、そのアポリアの在り方は、何らか強い確信を持つことが妨げられないという意味で懐疑主義のアポリアの在り方とも異なり、生み出される新たなアポリアの外で、裸のままで決して把握されはしないという意味で新プラトン主義のアポリアの在り方とも異なると指摘する。アポリアの働きについては本稿においても支持されるが、その思想史上の布置に関しては本稿では保留しておきたい。

- 4) *De ciuitate Dei*. 11. 6, Corpus Christianorum, Series Latina XLVIII, Brepols, 1955.
- 5) *Confess.* 11. 2. 3, 'ad nutum tuum momenta transuolant.'
- 6) *Confess.* 11. 11. 13, 'omne praeteritum propelli ex futuro et omne futurum ex praeterito consequi.'
- 7) *Confess.* 11. 6. 8, 'sonuerunt syllabae atque inde ex ordine, donec ultima post ceteras silentiumque post ultimam.'
- 8) *Confess.* 11. 7. 9, 'inquantum quidque non est quod erat et est quod non erat, in tantum moritur et oritur.'
- 9) *Confess.* 11. 11. 13, 'quis tenebit illud [: cor eorum] et figet illud, ut ... et uideat omne praeteritum propelli ex futuro et omne futurum ex praeterito consequi et omne praeteritum ac futurum ab eo quod semper est praesens, creati et excurrere?'
- 10) Meijerink は *De trinitate*, 15. 7. 13 を挙げ、prouidentia のみならず記憶によって為されることからであるとしている。(Augustin Über Schöpfung, Ewigkeit Und Zeit, S. 100, E. J. Brill, 1979.)
- 11) 『告白』以前に執筆された *De Immortalitate animae*, III. 3 (387年) においても、運動の目的(終止)は記憶なしには予測されず、運動の目的(終止)への予測なしには現在遂行している事への注視はありえないと、三つの認識活動の相関が述べられている(Euvres de Saint Augustin, 5, Pierre de Labriolle, Desclée, 1948. 所収)。
- 12) 'aliqua supra tempora' (*Confess.* 11. 30. 40) について、変化を蒙っていないが変化しうる、永遠とは別の尺度を持つ「天の天 (caelum caeli)」(*Confess.* 12. 9. 9) と解釈されることがある。それは、「時間を欠く」と明確に述べられている (*ibid.*, 12. 12. 15)。だが、いかなる時間も永遠の近似ではない。
- 13) *Confess.* 4. 10. 17, 'quidquid per illam [: caro] sensis, in parte est et ignoras totum, cuius hae partes sunt, et delectant te tamen. sed si ad totum comprehendendum esset idoneus sensus carnis tuae ac non et ipse in parte uniuersi accepisset pro tua poena iustum modum, uelles, ut transiret quidquid existit in praesentia, ut magis tibi omnia placent. nam et quod loquitur, per eundem sensum carnis audis et non uis utique stare syllabas, sed transuolare, ut aliae ueniant et totum audias. ita semper omnia, quibus unum aliquid constat, et non sunt omnia simul ea, quibus constat: plus delectant omnia quam singula, si possint sentiri omnia. sed longe his melior qui fecit omnia, et ipse est deus noster, et non discedit, quia nec succeditur ei.'